

▲ 討論▼

中野 — (高橋明) 岐阜県の事例だが、どういうメリットで、

あるいは、どういうことで、とりあげたのか。

高橋(明) — いろんなことがあるが、一人の選択で村の方向が変わる

ということである。

安原 — (高橋明) すぐれたリーダー、スタッフが出る条件は

どうなのか。後継者の育成をどうするのか。

長谷川(宏) — お二人からいくつかの事例紹介があつたが、どうも今まで

は後進地区に農村計画ができるよう、「家貧しくして孝子顯る」といった感じだが、そのへんはどう理解したらよいのか。

高橋(正) — 私はよくそのへんはわからないが、つくりうとして、つ

くことはなかなかむずかしいようと思われる。ただ、リーダーがリーダーたる資格は個性プラス環境であると思う。すぐれた事例のモデル調査の意義づけは、リーダーがリーダーたるゆえんは、一定の行為をすることであるのだから、その行為を対象化し、分析すれば、それを一般化すれば、他の地域にもサジェスションできるよう思う。

安原(明) — また、村の規模にも関係する。村研大会で余田先生が言

つてられたが、旧村規模の農協は残っていて、活発に動いている。

島崎 — 戦前のリーダーを再生産するメカニズムと戦後のそれの

メカニズムは、非常にちがうと思う。戦前は地主制に依拠したものであり、農地改革で崩れたあとのそれは、官僚機構であると思う。補助金にうまくとびついた者がリーダーとなるという側面が大変重要だと思う。官僚制機構が末端の村をつかむメカニズムをとらえる必要がある。体制に無関係なリーダーシップの論理は形式的過ぎるように思う。

岩谷 — 事例から、テクノクラートの働きをさせる背景はあるか。

高橋(正) — リーダーの機能を働かす条件は、戦略的には組めると思う。茨城県の集落営農推進事業でうまくやっているところがあるが、そこは普及員がずっと村の調査をしながら、リーダーグループがある「釣の会」を無意識的に形成していることから、それを横につなげていったということがある。リーダーがリーダーグループを形成することは一つのポイントである。また、岡山県の長船町、水田酪農の盛んなところ。ある酪農家が農協総代会で「長船町農業の将来を語る会」を結成しようと提案して、役場と農協が手を結んでうまくいっている事例がある。これは、下からのもりあがりで出来たものだが、しかし、実際の大多数は役場のあるやり手がうまく補助金をつかってやっているのが普通。もう一点、リーダーの要件ということで、個別合理性と地域合理性という概念を設定できないだろうかと考えている。村落が農業生産の中心であった頃は、地域合理性が主であつて、個別合理性がうしろに押しやられていた。日本では典型的には、農地改革以降、個別合理性が軸になって、地域合理性が背後になつた。それで、農基法以降、個別合理性だけを追求してゆくと、地域合理性と予定調和関係がなくなってきた。現在では、地域合理性を考える人がいなくなつた。地域全体に目をくばる人がいなくなってきた。かつては地主が自分の利害にからんで、地域合理性をある意

味でカバーしていたから、リーダーの資格があったのだと

思う。現在は、地域全体について一定の配慮をする経済的

必然性が農家のなかになくなってきたという面がある。今日、

この二つの合理性をどういうふうに調和させてゆくかとい

うことだが、リーダー論の関係で問題になるのではないか。

黒崎 — 地域合理性で何かをつなごうとすれば、むしろ農業以外
のものでつなぐ、だから、センターがつくられ、そして、
その利用が高かったということであるが、しかし、逆に、
そこから個別合理性を統合するような地域合理性を生み出
してゆく可能性はないのか。

高橋(正) — 農業生産にかぶさったものを考えてゆくのは難しい。町
内会活動的な生活環境整備は進むだらうけれども。

岩谷 — 農村自治との関係についてお伺いしたいのだが、とくに
生産力の関係から、農村では階層分化の過程の中で、意志
が統一しにくくなる。階層間の調和が自治という立場でど
う調整され得るのか。

高橋(正) — 私は、ますます多様化することは必常だと思う。しかし、
専業農家は個別自由に經營していくが、今日、地域社会の
中で承認されなくなってきた。専業農家が地域との関連を
意識した。地域合理性をふまえた、より高次の個別合
理性を追求する中核農家が出てきた。これが一つの展望に
なるのではないだろうか。

安原 — その地域合理性を考慮しなければならない条件は。

高橋(正)

畜産公害、機械が大型化して、それを兼業農家などに利
用してもらうことで償却するということなど。

中野 — 僕は千葉県の勝浦の農村に三年前から住んでいる。村の

内部では、地域合理性を視野の中に入れないと、個別合理
性は追求できないという状況にある。テクノクラートみた
いなものになる条件は、百姓をしていて、村の人々に僕の
作ったもの（それは野菜だが）で彼らを感じさせることで
あると思う。

島崎 — 「テクノクラートは兼業農家であり、地域定住者である」

とされているが、もう少し具体的にテクノクラートのもつ
ている条件は何なのか。

高橋(正) — 静岡県大東町大町、かつては大浜町と言われたところ。
集落体の水稻の協業栽培が一五年位続いているところ。前
産業課長が協業化を実行した。あまりにやりすぎたため、
農協から総スカンを喰らう。このテクノクラートが左遷され
る。若い課長に変わると、その課長は、自分の村で手始め
に新しいシステムとして、従来の平等出資・出役・配分を
一定の請負型に変えてゆき、翌年から各集落の協業經營を
実行してゆく、という事例。

島崎 — テクノクラートという言葉の印象からみると、農政機構
上、県の段階とみられるが、高橋(正)さんは、県段階をネガ
ティブに扱っておられるようだが、県段階は無視してよい
のか。

高橋(正)

——今までの動きからすれば、県は農林行政の主体であつたとは考えられない。単なる国のバイブルとしての性格が強い。国や県は、農政企画立案者として危険負担がない。町村の場合は社会的危険負担を常に担っている。

似田貝

——何故、テクノクラートと言わなければならぬのか。それから、農村計画とはなにならぬのかということ。テクノクラートというものは、リーダーをイメージしたり、あるいは、官僚機構のある段階の官僚そのものを考えたりする訳だが、農村計画の現段階の意味は、たとえば、地域農政を行つためのある自由な枠内の中に農村計画が位置づけられてきているのか、それとも、農村計画ということによって、農村そのものが自己変革の起爆剤になり得るのか、ということなのかな。

高橋(正)

——私がテクノクラートという言葉を使つたのは、これが初めてで、以前は地域リーダーという言葉を使つていた。地域リーダーという場合、集落レベル、町村レベル、農協レベルいっしょにして、農村レベルのリーダーを地域リーダーと言ひ、集落レベルのリーダーを末端リーダーと言つてゐた。しかし、どうも一般の地域リーダーは集落リーダーを使っていて、どうも明確でない。テクノクラートという言葉を使つたにすぎない。別にこれに固執するものではない。ただ、リーダーというものとも、市町村農政担当者というものとも若干違うように思えるのである。二番目

の問題は、高橋(明)さんにもお答え願いたいのですが、地域農政の二つの評価であると思う。国の地域を対象にした農政という解釈が一方であるが、私は自治体農政とあえて言つて、いるように地域主体による計画であると思う。そして、それに必要な資金はバックアップするかたちにせざるを得ないと思う。以前よりは、そのように変わつてきているようと思われる。住民がそこの地域農業を永続させていくうとする地域意志が形成されれば、自己展開が得られるのではないかと思う。

似田貝

——地方自治体における地域計画の条件（土地問題や資金のあり方など）が、整備されなければならないのでは。

高橋(正)

——その通りです。その条件を今回の研究会であらうてゆくことが、一つの課題となればよいと思う。

高橋(明)

——島崎さんがおっしゃった官僚制機構との関連でリーダー形成をつかむことは、大切なことだと思う。しかし、中野先生が言われたリーダー形成の条件というようなもの、たとえば、共同化集団の中でのリーダー形成も考えられる。つねに、官僚制機構と密着した形でリーダーが形成されるとは思わない。そこが、どう切れて、どう離れるかということも考えてゆかねばならないと思う。

高橋(明)

——農林省の開墾はよくないです。けずってね。肥沃な土壌を下に入れてしまします。肥料の先生に聞いたのですが、2t車や4t車で数台分入れたところで、大したことではない。

数万年のストックをつくるには、数十年と入れ続けるといふダメだそうです。少々入れたぐらいの堆肥はどうにもならない。

中野 一 堆肥を入れれば、それでよいという意見があるが、それは間違いでしょう。

島崎 一 ブタの排出量はものすごい量だからね。（高橋正へ） 変大きな盲点だと思っているのだが、合意形成についてですが、生活面では合意形成はできるけれども、生産面では非常にむずかしくなると指摘されています。そのところ、どうなんでしょう。

高橋正 一 事実は、みなさんおわかりだろうと思うのですけれど、これをどうするかという問題なんですが、テクノクラートあたりが、潜在的にある長期的な思考だと、副次機能をうまく使って説得するといったようならぬで……

長谷川宏 一 最近のブロックローテーション方式が、ところどころ出てきているでしょう。この事例などは、集落としての土地利用に関する合意形成なんかはできているはずなんですね。転作ということです。

黒崎 一 やっぱり、村へ人が戻ってくるということは、人間のストックのボテンシャルは少くとも高まりますよね。それをどうするかが、問題だけれども。それから、サークルとか趣味の会をつくって、コミュニティーセンターにみんな集まるのですが、やっぱり、これは高く評価したいという気

持ちが私にはあるんですよ。なぜかというと、はっきり言って、村は住みやすくなつた。今はそういう可能性がある。そうすると、テクノクラートだかりーダーだか、誰かがうまく誘導すれば、モティベーションが与えられ、そこから、人間のストックが高まつてくる可能性がある。そうなると、地域のことを考える人間（農業をやっている、やっていないは関係なく）が出てくるとしますね、そうすると、可能性の問題として、希望がもてなくはないなあと思う。

高橋明 一 豊岡なんかもそういう考え方ですね。

長谷川宏 一 ストレートに人がいるからって、農業振興とむすびつかないところが問題なんですね。

吉沢 一 （これまで討論の若干の整理として）似田貝さんから出された問題との関連で、農村計画をする条件を捲るということ、これは高橋正さんがお答えになつたのですが、農村計画を立てる条件を洗うということが、この研究会の課題ではないのか、という点。島崎さんからの問題提起との関連で、生産面での地域意志の形成は困難であるという点で、それを農業が都市産業として、土地計画まで含めた生産計画を地域計画としてどういうふうに計画するか、という問題があると思う。村の解体がいわれる中で、村の機能は一体どういうものだということ、この生産計画としての農村計画をどう立てるかというものとの関連で、もう一度問われなければならない問題ではないだろうか。農村計画と

いう課題を追求する場合に、どういう点をわれわれが研究会でボーリングしてゆかねばならぬのかという点について、ご発言いただければ、と思います。

長谷川(宏)——これまでの三回続けたテーマから考えますと、高橋正郎さんが農村自治と農村計画との関連を視野に入れるということを言わてましたが（今日はあまり言われなかつたが）、農村自治と農村計画というもののとの関連が中心になるべきだろうと思う。

島崎——それを忘れるといけないから、わざわざ副題としてあるのだ。

長谷川(宏)——副題をどう生かすかですよ。

似田貝——地域主体の農村計画をするということになりますと、そのことが農村自治ということであると思います。

安原——ただし、その場合に、高橋正郎さんの言葉を使いますと、地域主体、どういう農民がどういうエネルギーでどう実践していくのだろうかという、そういう問題がつき添つていいだろうと思います。今日の高橋(正)さんの話で、大前提となつて中核農家育成と個別的な経営の限界というような問題設定があつたと思うのですが、逆に言いますと、中核農家で五割までいかせる必要があるのかという、大前提そのものの問題も一つはあると思います。やっぱり、前提となっているのは、個別化の方向だろうと思います。そうしますと、生産における地域での土地管理といったむずか

しい問題がいくつがあるだろう。そういう意味で中核農家を戦略的なポイントにするということは、一つの課題であると思う。

高橋(明)——それから、僕は、地帯（都市化地帯とかいったもの）でかなりちがつてくると思うんです。山村なんかの場合、そこで人が生きていけるという、農業を基礎にして、そこいろいろなものを合わせて暮らしているのが農村である、農だけじゃないんだといった地帯の問題と、九千町歩などといった地帯とはかなりちがうと思う。計画を立てる場合に、日本の農業をかんがえて、土地利用計画を立てることは、重要になつてくるでしょうし、なんでもいいからといったものもあるわけで、一律に考えないということが必要なのでは。

島崎——安原さんの言われた、中核農家という言葉なんですが、これはかなり重要な概念で、農林省がかなり前に中核的農家という言葉を使いながら、一回使わなくなつた。しかも、この二、三年使つてゐる訳です。その経移はわからないけれど。従来、学会レベルで使つていて中核農家というのは、生産力の变革主体として、どう定置できるかという問題だったと思う。それは、戦前の農業構造から戦後の農業構造への変革のなかでの戦後農業の担い手として、中核農家という大きな課題がかかげられていたと思うのですが、今、このような農業・農村が壊滅的な状況になつてゐる中で、

あらためて主体として、現実の中では、大変むずかしいわ
けで、願望としての用語として使えば使えるし、農政レベ
ルのように一定の条件を操作的にはめて使うのかという、
その辺の理解を一応整理しておいた方がよいだろう。

高山 一 地域的、あるいは時期的にちがった形で、地域合理性と個別合理性がでてきて、どういった形で主体形成にかかわって、自治の問題として出てくるのか。それから、もう一つ、高橋(正)さんで気になるのは、地域的な合理性というものを媒介にして、中核農家を育成する、そのプロセスは大変むずかしいけれども、そこで形成される中核農家は、もう、いわゆる概念としての中核農家ではないのではないか。それを、実際に、地域という形で土地利用を入れてまかりますと、個別農家では処理しきれないことが出てきて、農家ハンチューではない、例えば、企業農家というのか、やはり性格が変わってくると思われるのですが。

高橋(正) 一 関連して、何故、今、農村計画ということを問題としなければいけないのかということについての共通認識が必要ではないかと思う。高度経済成長時期にも、農村計画といふことが、何らかの形であった訳です。町村、あるいは、農協が自分の地域内での営農類型に分けまして、将来のモデル営農類型をつくって、それを引っぱっていくという農村計画が主だったのです。それは別にみますと、產地形成につながっていたのですが、現在は產地形成計画や営農

類型の個別的な展開だけでなく、それ以外のものが視野に入っている。それ以外のものは何かということについて、明確に共通認識してゆく必要がある。

島崎 一 それは、農村自治をやった最後の年に、大沼さんの個別農家を中心とした大規模經營の矛盾が追求されたときの限界が出されていて、ここでの高橋(正)さんの地域合理性と生産力という問題、そういう形での生産力追求、確立、変革ということが、今ここで、必要なんだという一つの視点に立っているだろうと思う。

高山 一 地域的な生産力の構造（土地利用、あるいは、ストックの問題）を超えて、生産物を有利に販売していくのかというところまで視野に入れていかないと農村計画は失敗してしまう。そういうものを視野に入れていかねばならない情況をどう見るのか。いかに生産物を実現するかということが、農民的関心でもあるし、地域営農計画の中心になつてきているような気がしている。そういう意味で、農村計画、あるいは、農業計画が問われているのではないだろうか。

岩谷 一 昨年の私の過疎地域の問題とむすびつけて考えてみると、地域、農村、部落、制度的な自治体としての町村といったものが、重層化しているということはわかる訳ですが、今日、話しました、戦後の政府側がやる農村計画の中で、同じ農村地域内での地区間格差というものが、都市対

農村の格差といわれていたものが、例えば、末端集落と町村役場の所在地なんかの格差という問題が大きくなっている。言うならば、農村地域における都市対農村の問題が出てきているのではないか。そういう実態に対して、農村計画というエリアは一体どこに、重層化していることはわかるが、現段階において、特にまとをしほらなければならぬ農村なるものの問題の焦点はどこなのか。一つじゃないと思う。その上に、さらに生産力視点というのをもつてきただ場合に、そういう地域内部における格差の拡大ということになると、どうも大きな方向としては、末端の切り捨てといふような、とくに山間地帯、計画が進むにしたがって、そういう方向に進むのではないだろうか。そのとき、末端といふものは、果して、切り捨ててよいものなのだろうか。そういう問題がしりにくついているのではないか。したがって、農村における計画推進の担い手のようなものが問題になるとすれば、農村内における地区間のバランス問題を計画策定、計画推進、計画目的の中での位置づけるかという問題の中ではわかるのではないか。

討論の内容は、いさざか冗長になつたが、リアリティ重視の点から、若干の整理をおこなつて、全貌を掲載した。